

## 保 育 の 中 の 紙 芝 居

須 永 淑

紙芝居は手近に備えられていて例外なく子どもが喜んで集る材料である。誰にでも手軽に自由に扱える上に比較的値段も安い。これらの素材としての大きな長所が保育の中では不当な扱いをうけやすい。即ち安易な材料、あまり深く考えないで取上げる材料、価値少ないもの、付け足しのもの、添えもの、といった扱いで見すごされやすいのである。

私たちは保育活動の細部にわたっても教育的視点をきちんと定めて、小さい活動も短い時間も、すじを通して大切に扱わなければならない。その意味でも今回の発表を一つの手がかりとして今後その扱い方も素材も充分研究されてゆかねばならないと思う。

一般的初歩的な注意として何よりもまず見とおしをもって計画的に扱ってほしい。(突発的な事情で急に紙芝居ということになってもす早く見さだめた目的意識をもってほしいのである。)何のために、今、この紙芝居をとりあげるか、を明確に意識していることが肝要で、演じかたの工夫もその方向が定まってくる。そこで今回は保育でよく用いられる場面をいくつかにまとめてみよう。

第一には、本日の発表中の活動の例のように紙芝居そのものの内容を中心として総合的なねらいをもって充分楽しみながら充実した活動を次々に発展させてゆく場合である。絵の面白さ、お話のことばのたのしさ、物語の場面展開、その筋を追ってゆくスリルなどに心をおどらせながら、絵とおはなしを通して新しい世界がひらけ、心が育ってゆくものであり、紙芝居本来の特質を生かした取扱いである。勿論こゝでは特に絵、言葉、ともに充分吟味されていなくてはならない。

第二には、中心的な遊びに関連して扱われる場合がある。その興味を増し、取りくむ意欲をたかめるための動機づけとして使われるのである。これから行う遊びに対して子どもなりのまとまった見通しや期待がもてるような材料で、積極的に参加したいと思わせるような取扱いがのぞましい。又、運動会遠足その他新しい経験をした後では、その感動を共通のものとして深めるための扱いが考えられる。紙芝居をとおして自分たちの活動を再現し、たしかめ、共通のものとして身につけるのである。演じたあとで自然に話し合いに発展したり総合的な活動へとみちびかれるものである。

第三は、最も手近なありふれた用いかで、子どものまとめのため、即ち集団づくりのために最初の手がかりとして用いる場合である。家庭でテレビをみるように、緊張から解放された状態をつくるのに大変都合よい材料である。入園時の緊張感をとき、意識しないでみんなといっしょになって面白いとおもう時間をすごしてしまふことで、集団への参加の第一歩を容易にするのである。単純なユーモラスな物語、明るい日常生活の描写など、みじかいもので、楽しい材料がよい。二・三人より多勢で集る方が面白いからなお効果的である。扱う中で子どもと演者と応答する場面とか、一斉に返事をしたり、手をあげたりできるような材料は、自然に集って見たくなるものである。この活動の中で集団の感覚、仲間の意識への芽生えが見えてくるので、保育場面にたびたび取入れてゆきたいものである。

園の生活が身につくと集団としての共通の問題が出てくる。遊具玩具の取合い、食事やおやつの膳、身のまわりの始末などがそれである。みんなで考えて解決してゆこうとする姿勢への導きとして紙芝居はよく使われる。幼児の日常をよく知って、生活にピントの合った材料を使用すると効果の大きいものである。

この様に考えると、各時期各場所に使うのにふさわしい材料をそれぞれ充分に備えて、計画にしたがって使いこなすことを心がけてゆかねばならないと思う。

( 本学 助教授 )